第５３回　住宅部門　最優秀作品選評 「緑山の家」　審査委員　高橋　晶子

本コンクールの審査の特徴に、一次審査通過作品すべてを現地確認することがあげられる。現地確認をすると情報量が増えるだけでなく、周辺環境との関係や居心地の良さなど、書類と写真だけでは判別しにくいことが一目瞭然となる。独立住宅においては特に、 住まい手の個性が活き活きと伝わってくる。「この家で（十分）いい」というのが商品化住宅だとすると、施主と設計者が共同して考え実現した住宅は、「この家がいい」というものである。他にないユニークさが同時に普遍的な価値を伴う発見をもたらしてくれる、そんな作品を今年も選定することができた。

最優秀作品となった「緑山の家」は横浜市の成熟した住宅地のなかでの建替である。成長した木々で覆われ、公園に向いて豊かな眺望にも恵まれた高台の敷地に建つこの住宅は、外部環境と建物の関係が細心かつ大胆にまとめられている。

一枚の大屋根が２枚の壁だけで支えられたボリューム、その周囲をテラスがとりまく構成。建物は木々や隣家の状況を読み込んだ上で低めに抑えられながら、空間体験は豊かである。１階の寝室は庭木の緑が絵画のように切り取られて静けさを生み、２階のリビング・ダイニングは遠景の緑を望む全面　開口で、風が抜けさえぎるものがないおおらかさを持つ。

この作品には、普通の玄関と階段がない。上下階の移動にはいったん外に出て、テラスの階段を使う。靴箱は門扉の軒下にある。だから、ひとつの建物でありながら、離れを縦に積んだようにも感じられる。階段が外にしかない家は不便だと思われがちだが、庭に出ることが大好きな住まい手にはむしろ使い勝手がよく、上下の行き来の間に気持ちを切り替えられ、自然のうつろいに敏感になったという。

家の中にとりこまれている場所を外に出すことで、内と外を等価に生活の要素とする視点が見えてくる。テラスは外部の部屋である。そんな視点をさらりと、しかしきっぱりと実現した作品である。